HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	（書評）藤井 光 訳　ハサン・ブラシーム 著 『死体展覧会』（白水社エクス・リブリス、2017年10月24日発行、198pp. 2300円＋税）
Author(s)	瀬名波, 栄潤
Citation	北海道アメリカ文学, 34, 30-32
Issue Date	2018-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86196
Type	journal article
File Information	senaha_HAL_34_30-32.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【翻訳書】

藤井 光 訳
ハサン・ブラーシム 著
『死体展覧会』
（白水社エクス・リブリス、2017年10月24日発行、198pp. 2300円＋税）

瀬名波　栄　潤

藤井光にとって19冊目の単著翻訳書になる。彼の翻訳書の特徴である戦闘や暴力、多国籍性あるいは無国籍性を備えた作品だ。イラク生まれのハサン・ブラーシムは現代アラブ文学最高の作家の一人とされ、現在はフィンランドの市民権を持つ。作品は、英語版が先行し、イギリスのPEN翻訳文学賞を2度、インディペンデント紙外国文学賞はアラビア語作家として初めて受賞している。だが、母語での出版は難航し、ヨルダンでは発行禁止処分などを受けた。作家も作品も数奇な運命を辿っている。

本翻訳書も、重訳という数奇な運命を経て出版された。3月10日、本城誠二本学会会長の北海学園大学最終講義に京都から駆けつけた藤井光と面談し、3時間近く話を聞いた。

藤井光に翻訳依頼があったのは2015年3月。この時点でアラビア語版はまだ世に出ていなかった。底本としたのは、英国人翻訳家Jonathan Wrightが、ブラーシムの二冊の短編集『自由広場の狂人（*The Madman of Freedom Square*）』（2009）と『イラク人キリスト（*The Iraqi Christ*）』（2013）から7篇ずつ選んで一冊にまとめ、2014年に出版した*The Corpse Exhibition: And Other Stories of Iraq*（Penguin Books）だ。そして、翌2015年に原本*Ma'rad al-juthath*が、ミラノのアラブ文化交流団体Al-Mutawassitの協力を得て、ベイルートで出版される。底本とほぼ同じタイトルと構成だった。

ねじれて生まれた底本と原本の間で、藤井光は重訳という難行に挑むことになる。底本には英語的な書き換えがあり、原本にはアラビア語という藤井光には未知の言語文化世界があった。そのため、藤井光は、京都大学教授で現代アラブ文学専門家の岡真理氏に検証を依頼し、「数々の誤訳か

ら救って」もらう。英語の手を洗ってやるはイスラーム的な沐浴用の水を手に注いでやるへとより神聖な行為へ置換。第12話の英題は“The Reality and the Record”だが、邦題は原本通り「記録と現実」に戻している。第9話“A Thousand and One Knives”は『千夜一夜』を連想させるため、邦題は（英語版の別称でもある）『アラビアン・ナイト』に似せて「アラビアン・ナイフ」にした。東京外国語大学非常勤講師でアラビア語通訳・翻訳者の森晋太郎氏からも固有名詞の表記などについて助言を得た。例えば、イラク元大統領サダム・フセインはサッダーム・フサイン、アルカイダはアルカーイダにと、アラビア語に忠実な日本語を選んだ。英語版の副題は削除した。

藤井光曰く、翻訳依頼を引き受けた一番の理由は、第1話に配される標題作品「死体展覧会」だそうだ。なるほど、7ページと2行だけのこの短編が作り出す芸術的殺人依頼の緊張感は秀逸だ。逆に、「あの不吉な微笑み」は脈略のなさを如何に翻訳でわからせるか苦心したそう。評者個人としては、独白体の作品が印象に残った。人気番組＜記憶ラジオ＞に自らの物語を収録して貰い賞金を稼ごうとする群衆の一人僕が語る「ヤギの歌」、難民受入センターで自身の記憶を使い分ける「記録と現実」、そして、イラクを脱出して、メキシコ系の名前でオランダ市民になろうとする「カルロス・フェンテスの悪夢」はひときわ異彩を放つ。

イラクが第4次中東戦争に参戦したのは1973年。この年バグダッドに生まれ2000年にイラクを出国するまで、ブラーシムにとって戦争は生活風景であった。この日常で生き延びるために、無情に生きることが一種の規範として刷り込まれたのだろう。藤井光は「あとがき」で、ブラーシムの作家としての主題を要約するなら、非常あるいは非情ということになるだろう、と書いている。確かに、非常な日常であり、非情なほどに無情である。1960年代以降、アメリカにおける反体制運動は「個人的なことは政治的なこと（The personal is political）」と連呼し、個人を主体とした社会構造への変革を訴えたが、本作品では個人は今も客体であり消費の対象でしかない。これは、藤井光が2011年に翻訳出版したラウィ・ハージ著『デニーロ・ゲーム』（白水社エクス・リブリス）と同じだ。9.11が創り出した、グローバリズム神話へのアンチテーゼとも言える。

藤井光は『ターミナルから荒れ地へ』（中央公論新社、2016）で、翻訳

を嘔吐（202頁）に例えた。英語を体内に入れ、日本語という異物を吐き出すからだ。これは翻訳家の運命なのだろう。藤井光はこの運命に、作品毎に違うかたちで挑んだ。初めての単著翻訳は、デニス・ジョンソンの『煙の樹』（白水社エクス・リブリス、2010年）という660ページ余りの超長編へのいきなりの挑戦だった。ロレンス・ダレルの『アヴィニョン五重奏』（河出書房新社、2012-14）は引き返すことのできない五部作完訳への果てしない道のりだった。しかし、藤井光の挑戦は、自らの運命を切り開くことになる。2013年にテオ・オブレヒト著『タイガーズ・ワイフ』（新潮社）で本屋大賞（翻訳小説部門）を受賞。アンソニー・ドーアの『すべての見えない光』（新潮クレスト・ブックス、2016）では、ドーア作品の翻訳家として知られていた故岩本正恵ファンの期待に応えようと文体改造に挑み、栄えある第3回日本翻訳大賞を受賞した。

本作品は第4回翻訳大賞の最終選考まで残り、藤井光の翻訳は一貫して質が高いことを証明した。同時に、重訳という嘔吐は、異分野とのネットワークをも吐き出した。中東現代文学研究会例会でブラーシム作品を紹介した時は、作品の背景となる中東の歴史を細かに教えてもらったという。これは、ブラーシム作品が日本で知られるきっかけにもなった。数奇な運命を描いた『死体展覧会』は、翻訳者以外にも新たな運命を提供したのだ。

面談の最後に、次回の翻訳作品について尋ねた。Stephen Craneの*The Red Badge of Courage*（1895）とのこと。キャノンへの挑戦だ。西田実訳の『赤い武功章』（岩波文庫、1974）への挑戦でもある。現在、邦題を『勇気という赤い勲章』にしようかと思案中という。この挑戦は、年内に世の審判を受ける予定。